

聖書の学び／2009年

桑 栄 一

- 1月1日(神の母聖マリア) ルカ福音書の記述において、マリアは一登場人物であって、主役ではありません。カトリック教会の崇敬は、「母がたたえられることによって、子が正しく知られ、愛され、たたえられ、その命令が守られるようにするため」(教会憲章 66)であることを、理解しましょう。
- 1月11日(主の洗礼) 神から生まれた者とそうではない人とを明確に区別するという、初代教会の人々にとっては当たり前の考え方を前提にして、新約聖書は書かれています。このことを理解しないと、“兄弟を愛する”(Iヨハ4:20-21)という聖書の表現を正しく受け止めることが出来ません。教会共同体というものの愛による結束を動機づけたのは、イエス・キリストを信じる洗礼によって、お互いは“神から生まれた者”(Iヨハ5:1)であるということでありました。
- 2月8日(年間第5主日) 私たち教会は、これらの使徒たちを通して今も福音を聞き、救われた民の共同体である「キリストの体を造り上げてゆき」ます(エフェ4:12)。実に教会の宣教は、現代においても、使徒たちの宣教の継続であって、それは、イエス・キリストが開始された神の国がその再臨によって完成する日まで、続いて行くのです。
- 2月22日(年間第7主日) 教会が使徒継承によって受け継いで来たキリストの福音は、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)です。宣教するイエスと癒しの奇跡を行うイエスという、二人のイエスが存在したのではないように、教会には福音を宣べ伝えることと社会活動をするという、二つの独立した使命があるかのように考えてはなりません。明確に言うなら、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」でないような活動は、教会に委ねられた使命ではありません。
- 3月1日(四旬節第1主日) ニケア・コンスタンチノーブル信条が宣言している“罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め”という信仰が、私たちのものの考え方や日常生活の中に再び回復されねばなりません。いったいいつ頃から私たちの教会は、罪と死からの救いという福音のいちばん中心的な主題を語らなくなってしまったのでしょうか。
- 3月15日(四旬節第3主日) カトリック教会にとっては、第二バチカン公会議がもたらした典礼刷新の意義は、計り知れないほど大きいと言わなければなりません。それ以来、すべてのミサで司祭は、必ず聖書に基づく説教をすることが求められるようになりました。また信徒には自ら聖書をひもとして学ぶことが奨励されるようになりました。神の啓示に関する教義憲章(21)は、「それ故に、教会の教えも、キリスト信者の信仰そのものも、聖書によって養われ、規定される」と述べています。同22の実りとして、我が国でも新共同訳聖書が1987年に出版されました。しかし、それ以来40年を過ぎた現在の我が国のカトリック教会では、“神の力である十字架の言葉”(Iコリ1:18)が司祭の説教の、また信徒たちの信仰理解の中心主題となっていると言えるでしょうか。
- 4月12日(復活の主日) 新約聖書は、イエスが十字架で勝利した敵を、罪、死、悪魔とその支配などと呼び(ガラ1:4、IIテモ1:10、ヘブ2:14他)、さらに使徒パウロはこれらに律法を加えています(Iコリ15:56-57、ガラ3:13)。私たちキリスト者が洗礼の秘蹟によって、罪に対して死に、今や新しい命に生きているということから離れて、聖書を中立的な立場で読むなどということは、無益なことです。現代の一般人の目線に立って聖書を学ぶ、などと言う人は、キリストの救いからいちばん遠い所にいることになります。
- 4月19日(復活節第2主日) ミサの中の感謝の典礼で交わりの儀にあずかるのは、洗礼の秘蹟によって“新たに生まれた者たち”だけです。この交わりの儀こそが、なによりも先ず“互いに愛し合う”ことの第一

の中心です。かつてはこれを個人的信心として追求し、聖体拝領と呼んでいた時代がありましたが、現代では交わりの儀と呼ばれるようになった意味を理解しましょう。

4月26日(復活節第3主日) 平和という言葉はしばしば聖書とは無関係に、心の中に宿る一つの精神的な状態と解釈されたり、あるいは人間の努力目標としての争いのない世界達成のことだと考えられて来ました。しかし聖書が語る平和は、キリストがその死と復活を通して贖われた民である教会に与えてくださったもので、「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちは癒された」(イザ 53:5)のです。キリストの復活なしには、私たちは今もなお罪の中にあり(1コリ5:17)、神の怒りを受けるべき者であります(エフェ2:3)。しかし、実にキリストは私たちの平和であり(エフェ2:14)、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ている(ロマ5:1)のです。

5月24日(主の昇天) イエス・キリストへの信仰とは、今も生きて働いておられる“現在の”キリストへの信仰であります。私たちキリスト者は、カトリック教会の教理や教えから、あるいはイエスに関する昔話から、信仰の力を得るものではありません。そうではなくて、御自分の羊たちと共にいて働かれる現在のキリストから力を得るのです。ですから、ローマ・ミサ典礼書の総則は、私たちのミサについて次のように述べています。「こうして、新ミサ典礼書においては、…… 十字架上のいけにえと、ミサにおけるその秘跡的再現は、奉獻のしかたを除けば同一のものであることが教えられているのであり……」(前文2)、「ミサの祭儀は、…… キリスト者の生活全体の中心である。」(1)

6月7日(三位一体の主日) ローマ・ミサの解説書の中で、ユンクマンは開祭のあいさつについて次のように述べています。“けれどもこれは、世間の会合で行われるような、ありきたりのあいさつなどではない。私たちは神のもとに集まるのである。それは宗教的なあいさつであり、神からの祝福のことばに外ならない。つまり使徒の手紙の中に見られるものや、すでに典礼の中で広く慣用になったものである。開祭は宗教的なものである。そのことは、初めに十字架のしるしをすることでも、そのしるしをしながら「父と子と聖霊のみ名によって」と唱える古くからの三位一体の式文によっても、強調されている。”

6月14日(キリストの聖体) ミサの祭儀について、なによりも先ず明確にせねばならぬことは、これがそこに臨在される復活のキリスト御自身の行為であるということです。“これをわたしの記念として行いなさい”とは、聖書に記されたあの弟子たちとの最後の晩餐を、現在に再現すること(秘跡的再現)であって、それが生けるキリストの行為であればこそ、また私たちにとっての現在の出来事となるのです(ミサ典礼書の総則 前文2)。

7月12日(年間第15主日) 特に新約聖書において“悔い改める”という語は主に、対人関係についてではなくて、神と人との関係において用いられています。それは福音を信じて救われること、「(キリストの)血によって贖われ、罪を赦され」(エフェ1:7)ること、そして「御国を受け継ぐための保証」である聖霊をうける(同1:13-14)という実を結ぶはずのものとして語られています。

7月26日(年間第17主日) 私たちが歩んで来た我が国のキリスト教を振り返って見て、信仰というものを“神から招かれた”という形で理解して来たであろうか、はなはだ疑問に思えます。“来るべき神の国”という“一つの希望にあずかるようにと招かれている”(エフェ4:4)との聖書の言葉が、教会人の意識の中でほとんど忘れ去られていたというのが事実だからです。使徒パウロは、古くからの“信仰”という表現と並んで、これを“希望”という語で説明して言いました。「わたしたちは、このような希望によって救われているのです」(ロマ8:24)と。

8月16日(年間第20主日) ミサは、魔術ではありません。それは十字架の贖いに基づく“キリストの行為”であり、罪と死に勝利されたキリストの福音への信仰に基づく“神の民の行為”であって、そこには御子を信じる者に永遠の命を得させる“神の働きの頂点”があるのです(ミサ典礼書の総則1)。…… 私たちのミサが、福音への良き理解を得た信者たちの、意識的、行動的、充実した参加によって、やがて豊か

な実りを得るものになりますように(ミサ典礼書の総則 3、典礼憲章 11)。

- 8月30日(年間第22主日) 使徒パウロは、「キリストは律法の目標であり」(ロマ10:4)と述べて、キリストの福音の新しい言い伝え(ケリュグマ)こそが、今や旧約聖書における律法の唯一の正しい解釈であると主張しました。まさにこの“キリストの福音の新しい言い伝え”を、教会は今日に至るまで聖伝と聖書によって受け継いで来たのです。ですから私たちは“カトリック教会のカテキズム”を、すべての信者を聖伝と聖書へ導くいわば序論と考えるべきであって、これだけで完結した教科書のように思ってはなりません。
- 9月13日(年間第24主日) ニケア・コンスタンチノーブル信条は次のように告白しています。“主は、わたしたち人類のため、わたしたちの救いのために天からくだり、…… 苦しみを受け、……”。御子イエスの十字架の苦しみは、私たち人間が“人となられたメシア”を拒否し、排斥した罪のためでありました。そこで行われた神に対する人間の反逆の中にまさに自分がいるということ、 “サタン、引き下がれ”というイエスの叱責の言葉が気づかせてくれるのです。
- 9月27日(年間第26主日) プロテスタントでもカトリックでも、一般の信者の間には不思議なほどに相手を拒否する姿勢、あるいは強い対抗意識が存在しています。その原因は決して神学的なものではなくて、むしろ神学的無知に基づく俗論や悪口が蔓延しているからであって、敢えてエキュメニズムに関する教令が“あらゆる軽率と無謀な熱心”(24)と呼んでいるものです。
- 10月4日(年間第27主日) カトリック教会の御堂には、司祭席と祭壇と朗読台という三つの中心がありますが、そのすべてを用いてキリストは会衆と出会ってくださいます。祭壇における御聖体のキリストだけが一人前で、朗読台で御言葉を通して語られるキリストは半人前であるような感覚が、福音に覆いを掛けてしまつて(II コリ3:12-18)はいないでしょうか。
- 10月18日(年間第29主日) ミサの中の“ことばの典礼”で、司祭が聖書に基づいて説教をするとき、その解釈の指針となるのがカテキズムであり、また古代教会以来の信条であることを、私たちは大切に考えなければなりません。決して司祭の個人的な主観による、カテキズムや諸信条に沿わない“訓話”が、ミサの説教に代えられてはならないのです。今日カトリック教会における“教養ある信徒”には、そのような批判精神を“キリストの体を造り上げて行く”(エフェ4:12)のために捧げ活かして行くことが求められます。
- 11月8日(年間第32主日) 人間がこの世に作り出す平和や繁栄や豊かさに向けての努力に、神の力を利用しようとするのが宗教の役目であって、しかもそれが可能である……、という得手勝手な幻想を捨てることを、カトリック教会の信者は典礼暦の最後の三主日に、毎年その朗読配分を通して学ぶのです。
- 11月15日(年間第33主日) 今から一時代前、W.F.Albrightはその著書“石器時代からキリスト教まで”(第二バチカン公会議の啓示憲章にも大きな影響を与えた)の最後の章の結尾に、次のように記しました。“歴史学者は、キリストの秘められた計画の神殿の入り口で、立ち止まらなければならない。そこに入るには先ず靴を脱ぎ、歴史と自然の学問が通用しない領域、すなわち神が永遠の栄光の座から支配される世界があることを認めなければならないのである”と。
- 12月6日(待降節第2主日) 現代の通俗的キリスト教の一般的な傾向は、このような新約聖書が語る救済史の、神の国の到来に至る時間的展望をあっさり捨て去って、しかもなお自分たちはキリスト教の信仰に立っていると主張していることです。しかし聖書においては、神の国の到来に至る救済史の時間的展望は、新約の啓示から除去しても良い“神話的な枠”“古い時代の説明方法”などでは、決してないのです。
- 12月25日(主の降誕/日中のミサ) ですから、「初めに言があった」(ヨハ1:1)という、この“初めに”(エンアルケー)は、自然科学における時間の初めを意味しているのではなくて、私たちが神の御業を理解する出発点を指しています。…… 御子の受肉は、私たちキリスト者と教会にとっての、現在の救いと将来の神の国の約束を理解する、唯一の出発点なのです。